

# ☆村落社会の研究と

## 社会学

(金沢) 井森 陸平

社会学者だけではなく、経済、法律、歴史等の専攻者と共に、村落社会を研究する場合には、社会学者が単独で研究する場合に比べて、他の専門科学とは異つた社会学独自の考察観点といつたものの必要なことが一層痛感せられるので、このことについて私見の一端を述べさせて頂こうと思ふ。

これまでの二回に亘る共同課題研究発表を聴講した所からいつても、甚だ驚越なようであるが、必ずしも研究の観点や結果の上からみて、社会学特有のものが示されたとはいへないようである。その原因は、一つには実証的調査、サーヴェイをやれば、それでは社会学だとする安易な考え方にあるように思われる。近頃のように、経済や法律の専攻者もサーヴェイをやり始めると、サーヴェイだけで

社会学を特徴づけることが出来なくなる。勿論とういつた研究は経済社会学、法社会学といえるとしても、これらの外に社会学プロパガンダがなければならぬ。そこで社会学プロパガンダの特質は何に求められるかが問題になる。それはサーヴェイだけではなく、サーヴェイと共にその前提としての社会学独自の概念、理論に求められねばならない。サーヴェイはこれが検証の手段たるに他ならない。昨年度の共同研究課題中の農民運動についてみても、サーヴェイをする前に農民運動、一般的には社会運動に関する社会学的概念、理論が明かにされねばならない。若しそうでなく、ただ漫然とサーヴェイをする時には、他の専門科学の立場からの結果と対比して、特色のないものしか出ないこととなる。尤も農民運動、社会運動の概念、理論についても、本当に社会学的といわれるものが存するかどうか問題でもある。「プロレタリア社会主義」等にみえるゾンバートの社会運動の扱い方などに比べて、近刊の「社会運動」におけるヘバールの概念や観点は一応社会学であるといえるようである。こういつた社会運動の概念、理論が、戦後農地改革下の我が国農村という特殊の事情条件の下において、どの程度の妥当性をもつか、またどの程度現象の解明に役立ち得るかを確める方法として、サーヴェイが行われるものとみななければならぬ。

社会学的概念や理論の構成の方面の仕草は困難であり、かつ成果も上りにくいというので、一応の結果の出るサーヴェイに向うという弊が、今日の村落社会の研究にないであらうか。社会学概念、理論の検証、展開は実証的調査研究に俟たねばならないが、しかしまた実証的な研究から真に社会学の結果が

生ずるためには、それは社会学的概念、理論から出発し、これによつて導かれる必要があるといわねばならない。

村落社会の研究において社会学独自のものがみられ難い今一つの原因は、諸専門社会学の本来の主要研究対象からはつれた、何れの専門分野にも明瞭には属しない、いわば周辺の境界線的なもの研究が社会学であるとみる点にある。例えば今年度の共同研究課題たる農家人口と家族構成についてみても、これは物価や金融等の如き純経済的のものでなく、また契約、所有権といつた純法律的のものでもなく、何れの専門領域にも明確には属しない、周辺のものという意味で、一応社会学の研究対象とされるのであるが、しかし社会学だけではなく、経済学や法学の専攻の人々と一諸にこの同じ現象が研究せられる場合には、研究対象の面からは社会学の特色は現われず、また若し他の専門の人々が同じく実証的研究法による時には、研究方法上も社会学特有のものに認められないことになり、従つて単にこれだけでは到底社会学独自の研究成果は生じ難いこととなる。社会学独自のものは、一応社会学とみられる対象を取り扱うと、ただに満足せず、これを社会学固有の概念、考察観点から研究することに上つて初めて得られると考へる。人口、家族、階級等周辺の現象の研究における社会学の考察観点とは何ぞやというところが問題になるが、これが解決せられ、これを基礎とする実証的調査分析によつてのみ、社会学独自のものが